龍谷大学仏教文化研究所創設五十周年記念講演（一）

未来における仏教の所在を問う

――地方仏教とグローバル仏教との間主観性――

マーク・ブラム（ニューヨーク州立大学アルバニー校東アジア研究学部教授）

司会・講師紹介（那須英勝　龍谷大学仏教文化研究所運営委員・文学部教授）

最初にご講演をいただくのは、ニューヨーク州立大学アルバニー校東アジア研究学部教授のマーク・ブラム先生です。先生はアメリカ合衆国ロサンゼルスの御出身で、カリフォルニア大学バークレー校大学院で仏教学を専攻され『浄土法門源流章』の翻訳と研究で博士号を取得されました。現在、ニューヨーク州立大学アルバニー校で教鞭をとっておられますが、昨年（二〇一〇年）秋からはフルブライト奨学金研究員として、大谷大学で研究をされています。先生のご専門は日本仏教、特に中世の浄土教の歴史です。浄土真宗との関係では共著で、蓮如上人に関する英文の研究論文集の出版もございます。先生のご研究の一つのユニークなポイントは中世の日本仏教の研究をする際にも国際的な視点を持ったアプローチを用いられ、アジアの仏教文化圏の中での日本の仏教の思想史的展開を広く論じられているところであります。そういう観点から、もう一つの研究テーマとして「アジアの社会の近代化の中での日本仏教の思想史的展開」ということについて、近代の浄土真宗の教学者の著作に関する研究も手掛けておられます。本日は「仏教の未来」についてご講演をお願いしましたところ、快くお引き受けいただきましたことを、深く御礼申し上げます。それでは、これから国際的な視点から「未来における仏教の所在を問う」という講題でご講演をいただきます。先生よろしくお願いします。

マーク・ブラムと申します。今日、用意してきた話が十分通じるか、わからないところがありますので、疑問点があればいつでも質問してください。本日は、仏教文化研究所五十周年記念講演会にお招きいただき大変光栄に思っております。これを機会にますます龍谷大学とのご縁が深まり、皆様とご一緒に仏教文化の研究をさせていただければ、大変有り難く存じます。

今日のお話は、「未来における仏教」について、これから仏教が「どうすべきか」ということよりも、これから「どうなるであろうか」という観点で準備しました。またその中にいくつかのヒントを入れていますが、私自身、特定の仏教の伝統を代表する立場には立ちたくはありません。仏教といっても、一つのものではないということが、私にとっての仏教に対する見方の大きなポイントであります。それぞれの国によって仏教は違いますし、時代によっても仏教そのものが変わっていく、また社会とともに仏教が変わっていくことは当然です。その意味では「これからの仏教は、どういう仏教になるであろうか」ということは、なかなか難しい問題ですが、今日用意してきたのはアジアを中心とする仏教と、今から一〇〇年ほど前から出現して来た欧米仏教とが、どれほど並行しているか、またどれほど違うかというお話です。これから両者の間の交流は、ますます大きくなると思います。つまりお互いに影響をしあっているわけで、それがまた仏教の強みになることを希望しております。

さて、これは私見ではありますが、現在、全世界で特定の宗教を信じている人の数は減少していることは間違いないでしょう。しかし宗教そのものに対して関心を持つ人の数は減少しておりません。つまり私たちがたまたまある家に生まれて、その家で教わった特定の宗教に対して、教えられたそのままの信仰を維持できるかについては、確かに危機感を感じる人は多いです。しかし私はそのことが宗教自体に対する関心が弱まることだとは思いません。伝統的な教団中心の宗教を信仰する人々はだんだん減少しているのですが、宗教的な経験や宗教的な発想に対して興味を持つ人はとても多いのです。

例えば、私の場合、初対面の人に「あなた何をしているのですか?」と尋ねられると、「仏教を研究しています」、または「仏教学をやっています」と答えます。そうすると、社会的階層に関係なく、エジプト人でもフランス人でもアフリカ出身の人でも、相手がどこの国の人であるかは関係なく、ほぼ同じような反応が返ってきます。それは、「それはとても面白い」とか、「私にも仏教のことをぜひ教えてほしい」とか、ほとんどの人から返ってくるのは、「仏教」に対する非常に積極的な反応です。飛行機でたまたま隣に座った人でも、「三十分でもいいから、仏教は何だということを教えてください」と言われます。ごくあたりまえのことなのですが、やはり「教団仏教」と「仏教」とを区別するのがよいと

思います。現在、多くの人が、教団からは遠ざかりつつありますが、安心を求める宗教として仏教に近づいている人たちも増えているのです。これは未来における仏教のもろさでもあり、また同時にチャンスでもあると考えられます。

仏教の考え方は好きなのだけれども、お寺と縁がない、またはお寺のやり方についていけないとかというのは、典型的な反応なのですね。欧米社会で暮らす人々の間におけるキリスト教に対する考え方と同じようなものです。つまりヨーロッパ人、アメリカ人の場合は、子どもの頃、家族や親につれられて教会に毎週行っていたのに、「大人になっても教会に行っていますか」と聞かれると、「いや行きません」と言う人が多い。しかし「宗教に興味がないのですか」という問いには、「いやいや、宗教には興味があるのです」と答える。でも教会には行かない。教会は自分のものだという意識が弱まっている。でも宗教そのものに対しての関心は、まだまだあるのですね。英語で「アイデンティファイする（identify 所属を明らかにする）」と言いますが、「私はこの宗教や、この教団にアイデンティファイ（再帰）はしないけれども、その教えの中の核心的なところは求めている」という場合がまだ多いのです。

しかし、社会を越える宗教というものがありうるでしょうか。教団のない仏教は、文化のない仏教と同じですね。つまり問題が教団にあるのだったら、教団がない仏教を求めたらよいとお考えになるかもしれません。でも教団がない仏教というのはどこにあるのでしょうか。あるいは中国仏教、チベット仏教、インド仏教などと言われます。それは特定の文化と一体化している仏教です。それでは、特定の文化から離れた仏教はどういうものか。文化から離れた仏教があるかというと、それもないのですね。文化を完全に越えている仏教というものは、観念としては存在するかもしれないのですが、実際に社会の中に、そのような仏教を探そうとしても、見つからないのですね。

社会的コンテクストに基づいている仏教とは、哲学、歴史、美術にすぎないという学者もいます。しかし、哲学、歴史、美術だけでは仏教にはなりません。それだけでは社会的コンテクストに基づいているとは言えないのです。私たち学者も、こういう間違いをする時があるのですね。では文化に基づいてない仏教が存在できるかといいますと、それもありません。仏教を思想として教えるならば、それは哲学になるのですね。当然、すばらしい哲学になりますが、それは宗教ではない。宗教だったら文化にならざるをえないのです。

ここで「生きている」、「死んでいる」という言葉を使うことをお許しいただきたいのですが、「生きている」と呼べる仏教に二つの要素があるとしたら、一つは社会の中の存在感、つまり何々社会、何々文化の仏教だと言えるということ、もう一つはその仏教に参加できること、実践

の伝統があることです。実践の伝統がなければ、「生きている」仏教だとは呼びにくいですね。実践の伝統がある仏教には、将来ますます発展する可能性があると思います。この二つの点についてですが、まず、社会的な存在としての仏教には、私たちは歴史的な流れとして出会うことができます。しかし実践の伝統のある仏教といえるためには、そこに個人として参加する具体的な方法が開かれていなければいけません。どんなに立派な修行の道が示されていても、そこに個人として参加する方法がなければ、それは結局、観念にすぎない仏教になってしまうのです。この二点についてまず確認しておきたいと思います。

さて、ここからは、三つのポイントをとりあげて、この「生きている仏教」の未来について考えて行きたいと思います。まず仏教が、社会のニーズにどれくらい対応できるのか、それによって仏教の未来が決まるでしょう。仏教自体が、どれほど社会の役に立っているかということのみならず、社会そのものが、また仏教に対して何かを求めるということも大事なのですね。いくら仏教の側から頑張ろうと思っても、社会の方から仏教に対する関心がなかったら意味がないのですね。仏教は国によって、歴史も文化もさまざまであるので、統一された状態で仏教は動きません。仏教そのものには意思はありませんから、行為者性（agency）がないということです。仏教を実践する者と、ひろく社会に暮らす人々との間で、お互いの交流がなければ、コミュニケーションがなければ、その仏教には未来の可能性が低くなると思うのですね。

社会そのものがさまざまに変化するため、未来の社会が、どのようなものであるかもわからない。仏教の未来がわかりにくいように、社会の未来もわからない。では、我々はいかにして未来における仏教を生み出すことができるのでしょうか。未来の予測は難しいですが、過去から学ぶことは可能です。私たちは、これまでのアジアと欧米における社会の歴史的な発展や変容が、宗教に対してどのような影響を与えているのかということを歴史的に確認することはできます。つまり今までやってきたプロセスをもう一度考え直して、それに基づいて仏教の未来の姿を推測することはできるといえるでしょう。

今のところ世界で仏教に縁が深いのはアジアと欧米の二カ所です。欧米とアジア以外の地域、アフリカ、南米、ロシアとかはあまり仏教との深い縁は見えないのですが、これからはわかりません。その中で、アジアと欧米では、仏教的な学問を大学で学べることはいいのですが、学問だけでやったら実践がないという問題が生じてきています。先にも述べましたが、実践がない仏教は宗教ではなく、ただの宗教史とか哲学の一部でしかありません。

すごく有名な寺院は「遺物」や「遺跡」になっている意識が当然あると思うんですが、それ故、現状はそういう所に「参拝」することより「おとずれる」ようになり、宗教的な側面を感じにくくなってきました。私達はいにしえの宗教的遺物を現在の心でどう見ているのでしょうか。たとえば京都や奈良の有名な寺院を訪ねる日本の人々を例にとって考えてみましょう。私は、この一年間、京都に住んでいるのですが、あまりお寺まわりをする時間がないのです。でも、できるだけ時間を見つけてあちこちのお寺に参拝をしています。その経験の中で、非常に多くの日本人が寺院に参拝している姿をみるのですね。日本人が沢山行く有名なお寺に、どういう気持ちで行っているか、大変興味深いですね。「参拝」と言っても、日本人がお寺に行く理由は、そこが博物館のように古いものが保存されている場所、美術的価値の高いきれいなところ、または歴史を思いだすところであるから行くのか、宗教的な場所として寺院に行くのかという問題です。逆にこの点に関連して、大変面白いのは、京都では、博物館に展示されている仏像の前に、時々お金がおいてあることがあります。博物館なのに宗教的な気持ちになることもあるみたいですね。

しかし、奈良の法隆寺とか宇治の平等院とか、すごく有名な寺院に現在どれくらい宗教的な感じが残っているのだろうか。またそういったお寺自身の立場にも、どれほど宗教的な意識があるのかということについては、すごく問題だと思いますね。この間、私は平等院に行ったのですが、阿弥陀さんの前には十五分くらいしか入れてくれないのですね。その十五分の間に、そこで働いている人たちが、案内をして説明してくれるわけです。それが終わったら一分ほどだけ、ようやく一人だけで阿弥陀さんに向かう時間がやってきます。だから、そこでは阿弥陀さんにお会いして、阿弥陀さんの顔を見て、そしてそれが自分の心とどうやって共鳴するのかということを考える機会がほとんどないのですね。それぞれのお寺の立場もあると思うのですが、お寺が博物館のようなものか、または商売のようになってしまっていることは困ったものだと思います。皆さんはどう思われますか。

次に少し視点を変えて、欧米の仏教について考えてみましょう。欧米の仏教が、アジアの仏教と異なることは当然ですが、仏教が中国から日本に伝わってきた最初の百五十年間の歴史を思い起こすと、それはちょうど、今の欧米の仏教と似たような状態にあるのですね。しかし、ここで重要なポイントは、欧米地域における仏教は、今後もマイノリティの宗教運動でありつづけるとしても、欧米人が仏教という宗教に関心を持てば、仏教は世界的にますます大きくなることが出来るだろうと考えられます。そこで、第二のポイントは、それは好むと好まざるとに関わら

ず、現在、欧米は世界的に文化的な影響が強いところですね。

アメリカと西ヨーロッパに関して今、日本で大きく取り上げられているのは、英国王室のウィリアム王子とキャサリン妃の結婚式です。その後二人はハネムーンにカナダ、アメリカに行っているところですが、それが日本でも毎晩のニュースになっています。自分の国には関係ないのに、なぜこんなにニュースになるのでしょうか。イギリス、フランス、アメリカの文化は、関心を持ちたくなくても、世界的に関心を持つようになっているわけです。そういった状況の元で、もし仏教が欧米のテレビのニュースや新聞で取り上げられるとどうなるでしょうか。現在の世界の状況では、欧米で仏教が流行すると、またそういうところで仏教が成長すれば、それだけで全世界的に影響がおよぶことになりますね。

東洋仏教と西洋仏教を比較する時には、これを現代社会の発展、もう少し限定すれば、欧米の発展を通してできたパターンを歴史的に認識することが必要でしょう。そして、そこにおける宗教と社会との関係が問われるべきなのです。なぜ今アメリカ、西ヨーロッパに仏教が成長しているのだろうか。それは仏教が新しい考え方をもたらしたのか、それとも欧米の社会が変わってきたためなのか、その両方を考えないとだめなのですね。

つぎに、インターネットの影響を取り上げてみましょう。私はここで、もう少し具体的に「インターネット仏教」という言い方をしたいと思います。現在、映画、音楽、コンピュータだけではなく、インターネットそのものがアメリカ文化を中心に発達していることは、皆さんよくご存じだと思います。そして、そういうアメリカのインターネットの文化の影響が国際的である限り、国際的な共通語は必然的に英語中心になってしまいます。現在、仏教が欧米に広まってきたプロセスにおいては、アジアでインドから中国に仏教が伝わっていった時と同じように、仏典翻訳の役割が大きいと思います。言語を英語だけに限ることはありませんが、仏教の国際化の可能性を見いだすためには、現実的に仏教の英語化という手段が重要になることは間違いありません。それと同時にインターネットの成長は、誰も止めることができないものであり、仏教にとって、インターネットがこれから新しいシルクロードの役割を果たすことは間違いないと思います。

しかし文化的なコンテキストとしては、インターネットはこれまでの仏教がインドから中国に伝わってきたのと同じようにはいかないのですね。インターネットの情報は統制することができないし、インターネットに上がっているデータは完全に削除することができないということも大きな違いです。インターネットに一度載ってしまうと、そのままずっと、どこかに保存されている。そこには、無常観というものはないです

ね。時間的、空間的制限もない。またデータの真偽が判明しにくいところも多い。

日本も同じことだろうと思いますが、大学で講義をする時、学生は情報を求めて、すぐインターネットにいってしまいます。学生が論文を出す時、「その情報はどこからきているのか」と聞きますと。「インターネットでみた」という答えが返ってきます。それで、「そのインターネットのサイトの情報はあてになるのか」と聞いたら、学生はたいてい「さあ」といって黙ってしまいます。そこで、「インターネットはあてになるところと、あてにならないところがあるのではないか」とさらに聞きますと、「そうですね」といってまた黙ってしまいます。「大学の図書館で探したらわりとあてになるけれども、インターネットの情報の真偽性はどうやって判定すればよいのだろうか」と学生は当惑してしまいます。でもこれからインターネットはますます発達するに決まっていますから、これは大きな問題ですね。宗教や仏教の展開がインターネットに依存することは、情報伝達の手段がこれまでの伝統的な仏教のやり方と根本的に違うので多少の不安はありますが、これからは「インターネット仏教」について、しっかりと考えていかなければならないと思います。

つぎに、未来におけるアジアの仏教ですが、伝統的な文化を保存できる慣習や制度として、アジアの仏教国が持っている仏教の価値が一層認められるようになると思われます。宗教的思想のみならず、伝統的な美術、文学、演劇、それに死者に対する扱いなども仏教文化の中に入っているのですね。この傾向は、これからアジア諸国でモダニズムが発展をしていき、さらにポストモダニズムの状況に入る時、顕著に現れてくると思うのです。現在、アジアの諸国の中で、明確にポストモダニズムに入っているのは、私からいえば、日本だけですね。また、韓国と台湾は、もうすぐ入るだろうと思います。これは判明が難しいですが、タイ、中国、ベトナムなどの国も続いてポストモダニズムの社会になるだろうと考えられます。社会がより複雑になると、自分なりの思想を明確にしようと思う人たちが増えます。それがポストモダニズムの社会の一つの傾向です。そういう人たちが増えるとアジア社会の傾向がまた変わって行くでしょう。

このモダンとポストモダンはどこで区別できるのかということですが、ポストモダンは個人中心的になり、社会と国家との合体感が薄くなります。ポストモダンの社会の中で、個人個人のことを強調する気持ちになる人が増えて行きますが、仏教はそれに対して大きな役割を果たすと思います。グローバリゼーションの中で社会が成長していくと、国家ではなくて、個人としてのアイデンティティを強く持つ人たちが増えていきます。その中で、特定の国の境目を越える思想として、仏教に魅力を感じる人たちが増えるだろうと思います。

日本では、明治維新の際に仏教がかなり弾圧を受けたことは、仏教が江戸幕府との密着な関係があったことだけがその理由ではなく、仏教は元々日本のものではないという批判も、一つの問題として廃仏毀釈の考えの根本にあったのですね。それは仏教が中国で受けた抑制と同じことで、仏教はどこかよその国のものだという見方です。実際には、仏教はインドのものや中国のものではなくて、仏教はそれぞれ国の文化の中で成長したものなのですが、仏教国という意識もあるが、仏教の実践の中で普遍的な面が強く意識される傾向があります。それは一方で、国家意識が強くなる時代には、仏教に対する反発の気持ちがそれぞれの国で高まることになるわけです。それは仕方ないですね。江戸時代の仏教に対する議論には、すでにそういうことがよく出てきます。

未来の仏教の話に戻りますが、欧米には大学で教養教育を深める学問をすれば、国際的な活躍をしやすいという伝統があります。アメリカでは小規模で文学部のみの大学がまだまだ多いのです。そういう大学は、エリート教育をするプライベートスクール（私立学校）なのです。そういう大学の教養教育の場で仏教思想が取り上げられていますが、これからアジアの諸国でも同じような現象が増えるだろうと思います。アジアの裕福で教養のある階級でも仏教文化の歴史的な知識が評価されてくるだろうと私は個人的に考えています。アジアの諸国では、それは仏教に戻るということになりますね。仏教に戻る傾向とは、単なる文化の鑑賞から始めるかもしれないのですが、次第に宗教としての仏教につながっていくところがあると思います。なぜかというと、文化は宗教に支えられているからです。仏教の文化的価値観は宗教的思想に基づいています。仏教の文化的な表現は宗教的な面より目立つけれども、その根は宗教にあります。

私が勤めている大学でも、日本学を専攻している学生がかなりいます。現在、アメリカの国家としての関心は、中国にむいています。中国はアメリカの防衛のパートナーとか対立とか、いろいろな表現はありますが、アメリカの国際ニュースでは、中国のことばかり出てきます。ニューヨークタイムスには毎日、中国に関する記事が必ず載っています。かつては日本のニュースの方が多かったのですが、今、日本が取り上げられるのは週に一度くらいしかないですね。これが教育にどう反映されるかですが、私の所属する東アジア研究学部では中国語、日本語、韓国語を教えています。そこで中国語を学ぶ学生の方が多いと思われるかもしれません。しかし実際には日本語を専攻している学生が、はるかに多いのです。それはなぜだろうかと、学生に聞いてみると、彼らが、高校時代に、Jポップか、マンガにはまってしまって、それがきっかけで、大学で日本語を勉強することになったというのです。

仏教の思想を教える教員としては、マンガはマンガなんだけれども、マンガの中に日本の文化が入っているから、そこからより深く考えてみてほしいと言う指導をしています。しかし、この日本のマンガに出ている物語はどういう文化にもとづいているのか、その文化のもとに、どういう発想や価値観があるか考えていくようにして、すこしずつ仏教の思想の方につれていくわけなのです。しかし、学生もそれに気づくと、皆、すごく喜ぶのですね。マンガを読むのがより楽しくなるからだそうです。

仏教は現在、アメリカをはじめ、欧米で急速に成長していることは間違いありません。これは大学出身のインテリだけではなく、あらゆる階級で見られる現象です。それは面白いことです。大学では、仏教の講義を受講する学生の数も増えています。また大学の外では、仏教教団も、かなり成長しています。これは既成の教会からの疎外という現象だとみなす人もいますが、それだけではないと思います。しかし最近の欧米における宗教と社会と歴史の流れを考えると、仏教が、欧米社会がこれから向かう方向に、どれほど適切に対応できるのかという問題になるのですね。欧米社会で宗教が発展してきた過程から説明すると、アジアとは同じパターンをたどらなかったのですが、やはり共通点もあるし、これから共通するようになると思います。

少し歴史的な話になりますが、中世以後の欧米社会における、宗教と社会との関係を六つの段階でリストアップしてみると次のようになります。リフォメーション（Reformation）つまり宗教改革の時代があり、つぎにエンライトメント（Enlightenment）の時代と呼ばれる啓蒙主義の時代があり、ロマンティシズム（Romanticism）の時代、モダニズム（Modernism）の時代、そして、ポストモダニズム（Postmodernism）の時代になりました。それでは次は何か。仮にインターネット・センタード・カルチャー（Internet-centered Culture）、インターネット的文化の時代だと思います。もちろん、一つの時代が終わってから、次の時代がきれいに始まるものではありません。新しい時代の中により古い時代の段階のパラダイムが続いているし、モダニズムとポストモダニズムの場合は、例えば、アメリカの社会では、第二次世界大戦後、ほぼポストモダニズムに入っているのにそれを認めようしない人が今でも多いのです。また現代でもロマンティシズムに執着している人も多いです。このように現実は複雑なのですが、しかしモダニズムの時代は、アメリカでは間違いなく終わっているのです。

初めの、宗教改革の時代というのは、十六世紀の現象ですが、これはプロテスタント教会をめぐって、カトリック教徒との対立があって起こってきた運動です。さまざまな形をとりましたが、プロテスタントという語義はプロテスト、抗議という意味をもつ言葉からきている用語で、

これはカトリック教会に対する抗議だけではなく、西ヨーロッパ社会の権力体制に対する抗議でもあったのですね。宗教改革は新しい宗教をつくっただけではなく、新しい国家をつくった拠り所にもなっている。西ヨーロッパの宗教文化や教団をつくる大胆な一歩になったのは宗教改革でした。既成宗教とそれに基づく社会の変革ももたらしました。

つぎに、啓蒙運動の時代についての、わかりやすい歴史的な表現は、アメリカの独立戦争の時につくられた合衆国憲法がよい例でしょう。アメリカの憲法のつくり方そのものが啓蒙運動の典型的な表現であり、またそれはフランス革命の発想でもあります。啓蒙運動は、十七、十八世紀に起こり、二つの目立った特徴があります。それは、まず合理主義運動と呼べるものでしょう。二つめは政教分離の考え方です。政教分離は、この時代の最も大きな業績であるといえるかもしれません。合理主義を評価する人にとっては、政教分離とは政治が宗教から離れようとする考え方だと理解している部分があります。また宗教を評価する人にとっては、政教分離による宗教の脱政治化は、むしろ宗教の純粋さを強めることになると理解する傾向があります。いずれにせよ、政教分離によって、政治家は、ようやく宗教教団の影響から離れることができたわけで、宗教指導者の持っていた権力を、ある程度まで無視して国をつくれるわけです。しかし逆に宗教を中心的に考えて生きる人たちにとっては、政府の宗教に対する干渉から離れて生きることができるわけですので、その結果として宗教家は純粋な宗教運動ができるという面もあります。

欧米社会の政治においては宗教の発言力が非常に大きかったのです。現在でもそうです。今でもヨーロッパでは政党の名前に「キリスト教」がついているものが確かに多いです。ドイツでもスイスでもそうです。ということは、一口に政教分離といいましても、理想としては政教分離の考え方ができたのですが、現実にはまだまだ完全には実現していないことは事実です。政治家たちに対しても、宗教改革運動をしようとする人に対しても、政治と宗教を分けた方がいいという人に対しても、一般的な市民は抵抗をする気持ちがまだあります。

これは、現在のイスラム教と欧米の文化との敵対・緊張の問題とも共通する点の一つです。イラスム教の場合、政教分離はありえません。宗教的な役割は政治だということですね。これに対して、私たち欧米人は、政教分離だから宗教は政治から離れるべきだというのですが、実際は欧米人のやっていることもイスラム社会と似ているのです。欧米の政治的指導者たちが、イスラム社会に対して政教分離がないと批判しておきながら、実際には自分の国の中でも政教分離はまだ完全に実行していないのです。欧米のイスラム社会に対するそういった批判は、自分の国でも政教分離が完璧にできてないことに対する、ある意味では後ろめたい気持ちの表現だと思います。

次は、ロマンティシズムの運動の時代です。これは十八世紀末から十九世紀に始まる、啓蒙運動の合理的なものに対する反発として、中世文化に戻ることを強調するという特徴があります。ロマンティシズムは、人間の原始的な感情を重視し、中世的なものに戻ることを目指す運動と言えます。美術的、感傷的であり、古典の重圧からの解放でもあります。また科学の理屈でできた世界観からの解放でもあるとも言うことができます。

このロマンティシズムを代表する音楽はベートーベン（一七七〇―一八二七）やチャイコフスキー（一八四〇―一八九三）、文学ではメアリー・シェリー（一七九七―一八五一）の書いた『フランケンシュタイン』とか、アメリカ人として目立つのはエドガー・アラン・ポー（一八〇九―一八四九）ですね。『フランケンシュタイン』でも、ポーの小説でも、恐怖感が強調されていますが、ロマンティシズムの面白いところは、非常にきれいな感情と同時に、恐怖感がいつも一緒にあることです。これはゴシックのスタイルともいえそうです。観念よりも合理よりも、気持ちで感傷的に動いていることが強調されます。ジェーン・オースティン（一七七五―一八一七）という、この時代の小説家が書いた本は、近年は、毎年のように、この作家の書いた小説に基づいた映画がつくられていることからもわかるように、今でも大変人気があります。欧米の文化の中ではロマンティシズムは終わらないものですね。

その次がモダニズムの時代です。これは社会の中の分野によって、該当する歴史的年代が異なりますが、宗教の立場からいうと、アメリカと西ヨーロッパではモダニズムは大体十九世紀中頃から二十世紀、第二次大戦までです。ただし、ソ連や中国ではいまだそのままで変わっていません。モダニズムを政治的に言うと、もっと古く遡ることがあるといわれ、スペイン統一からモダニズムは始まっていると説明する人もいます。またモダニズムの時代を見ると、国家の体制として帝国主義の台頭が目立つことですね。十九世紀末にはヨーロッパの列強国は植民地を全世界につくっている。そしてそれはモダンな国家だという意識でありました。

モダニズムの時代の宗教には脱神話的なところも強いといえます。神話よりも歴史に基づく宗教ということです。日本でも二十世紀はじめには浄土教における神話が問題にされているわけですね。浄土真宗や浄土宗がモダンな宗教になるためには、神話をどう処理すればいいかという問題が取り上げられました。例えば、浄土は神話であるのか、浄土は本当にあるのかという問題です。また往生を神話的に考えるのか、実際に人間の経験として理解するのかといったことが問題とされるという現象です。

モダニズムの時代の宗教の特徴の一つとして挙げておきたい事は、実は、原理主義運動もこの時代に始まったということです。原理主義運動というのは、キリスト教の場合は、聖書の文献学的解釈に対する反発の表現として始まりました。現代でも、宗教的にはこの原理主義運動は大きな問題なのですが、この問題が一八九〇年代になって初めて出てきたということは、聖書の文献学的な研究がこの頃に発達することと関連しています。文献学的な研究によって、聖書に書いてあることが歴史的にはありえないことが示され、聖書はそのまま信用できなくなります。そういうことに大きなショックを受けた人たちが、アメリカでは原理主義運動に向かうことになったのです。アメリカのキリスト教の原理主義は聖書を全部文字通り信じることです。原理主義的キリスト教徒は、聖書のテキストは象徴的に書かれているのではなく、そのまま事実として疑わないのですが、ある意味ではそれはモダニズムの時代に現れた宗教表現の一つなのです。

さらに、貴族尊重の社会から専門家尊重の社会に変化したこともモダニズムの時代の特徴です。一九世紀までヨーロッパ社会の指導者たちは貴族出身でした。しかしモダニズムの時代になると、貴族の出身である事よりも、大学で専門教育を受けた専門家の知識の方が信用されるという時代です。これは大きな変化です。

ただし、現在は、このモダニズムの限界が見えてきています。今の東日本大震災で生じた原発の問題も、一つのモダニズムに対する限界を示していると思います。東電の人はみんな専門家ですし、また政府の原子力保安院の人たちも専門家です。でもそういう専門家が信用できないことがわかってくると、モダニズムそのものが崩れてしまうでしょう。ある意味で、エリート大学出身の人はモダニズムの時代に入ると新しい貴族になっているのかも知れません。僕も京都大学にいたことがあったのですが、日本に来ると、よく「日本でも勉強されたのですか」という質問のあとで、「どこで勉強しましたか」と聞かれます。それで、「大谷大学、仏教大学、京都大学などで勉強しました」というと、やっぱり「へー、京都大学ですか」という反応になりますね。

その後に続くのがポストモダニズムの時代です。戦後から現在までは、むしろモダニズムの崩壊の時代というべきだとおもいますが、適当な言葉がないから、ポストモダニズムというようになりました。モダニズムの時代に信用されていた専門家に対する不信感がつのる原因の一つは、彼らがだれにも説明できないほど残酷な倫理違反をおかしたことにあります。そしてそれによってモダニズムが信用できなくなる時代です。これは第二次世界大戦中のドイツにおけるナチの殺人工場が有名な例です。さまざまな専門家がこの工場のために協力的に計画、建築、実行に携

わりました。そして、その専門家達は戦争が終わってからの裁判では「専門家として頼まれた仕事にすぎなかった」という言いわけをしていることに皆びっくりしたわけです。そこにモダニズムに依った社会の秩序は信用できないのではないか、という考え方が生まれてきました。

これは人々が、ポストモダニズムの方がモダニズムよりよいと考えているのではありません。ポストモダンになったということは、仕方がないからそうなっているという気持ちです。つまりポストモダンの立場には、ある程度、被害者的な意識がみえます。モダニズムの時代の価値観そのものが相対的なものになり、合理主義的な価値観を客観的に正当化することができなくなる。したがってポストモダンの立場からみると、客観的な知識というものもありえないと思う人が多くなります。この時代には、宗教においても独断的でない宗教がだんだん求められてくるようになります。ポストモダニズムでは宗教の相対性が強調され、時代によって、また文化によって、宗教も変化をすべきだということが期待されます。この点においては、仏教の持つ国際的なイメージは、この問題に対して、高く評価されています。例えば原理主義に立脚している宗教は、時代に拘わらずそれ自体は変化するはずがないものとして考えられ、仮に変化すれば宗教が弱まると考えられています。仏教は方便が中心的であるからこそ寛容性が高く、倫理観についても、国によって違うというところが認められているからこそ、仏教が評価されているのです。ポストモダンの時代になってから、仏教は急に受け入れられやすくなったといえるでしょう。

そしてインターネットの時代になると、これが、少しややこしいのです。大学の研究者の中にはポストモダンの時代は、すでに終わっているという人もいる。しかし次の時代は何かというと、皆わからないのですね。でもインターネット中心の時代だろうと思うようになってきています。では未来のインターネット中心的な時代における仏教はどのように変わるのでしょうか。

インターネットの場合、ユーザーにとっては時間的、空間的制限なしに、知りたい情報を取捨選択できる利点はありますが、パソコンを通してやりますから、知り得た情報がどれほど本当のものかについての限界はあります。しかし、限界はあるにも拘わらずインターネットのホームページは増加してゆくことでしょう。そして、その中に仏教に関して問われる5つのポイントが考えられます。

インターネット仏教で、まず問題になるのは、インターネット上での仏教文化の不明確さです。インターネット上には文化がないということではないのですが、伝統的な仏教が正確に登場するサイトもあるし、伝統的な仏教教団のサイトでもあてにならないものもあります。英語の仏教サイトには、インターネット発達以前の仏教の個別的な面を強調するサイトもありますが、反対に仏教の普遍性を強調するサイトもあります。

しかし、どんなプロセスでそうなっているのかは判別しにくいのです。インターネットにおいては個別の文化的コンテキストが欠如しています。ではそれによって、インターネット仏教への理解は、どういうものになるのでしょうか。それは観念的であろうか、思想中心的だろうか、それともインターネットの画像中心的な仏教になるのでしょうか。

アジア仏教の現状における実践と関わる問題ですが、インターネットによる仏教の実践の問題が二番目のポイントです。現在のアジア仏教における実践活動は、かなり弱まっていることは間違いないとおもいます。インターネットと関係なく、そういうことがあるということです。これは重要な問題で、中国、ベトナムはどうかといいますと、国内の革命のためにベトナムの場合は二十五年間、中国は四十年間、仏教の実践がほとんど途絶えてしまっています。私は、四年ほど前にベトナムの仏教専門学校に招待されていきました。そこで「今、問題になっていることは何ですか」とたずねると、「私たちには瞑想を教えてくれる先生がおりません。皆、逮捕されて牢屋で死んでしまった」とか、「牢屋に十五年間ほどいたので体が弱ってしまって、とても瞑想を教える立場ではない」ということなのです。

これに対して、日本ではおよそ一〇〇年以上前から、ほとんどの仏教寺院が世襲によって継続されてきています。そのために僧侶に対して要求されている実践とは何かということです。日本では、大学の課程と同じように、僧侶になる実践の課程を修了することで寺院に就職する資格を得ることになる。一生のあいだ実践により仏教への理解が深まるということが昔はあったわけですが、今の日本ではそれは珍しくなってしまいました。多くの僧侶にとって仏教の実践は就職するためのものであるからなのだということです。それではインターネット仏教だったら実践はどうなるのでしょうか。実際にインターネットでは「バーチャル座禅」というのがあります。これは面白いですね。インターネット上で、ベルを鳴らして線香に火をつけて、でもサイトを見ている人は座禅をしているはずなのだけど実は何をしているかわかりません。

インターネット仏教は仏教の実践問題を解決するのに役に立つのか、それとも実践の減少を逆に促進するのか、それは大変気になるところです。仏教をインターネットでしか知らない人にとっては実践の経験はないのですね。しかし、仏教だったら実践なしでも宗教的な経験ができると考えていることが問題ではないかと思うのです。インターネットによって仏教が広まることは、ある意味ではいいことだけど、そこには本来の意味での実践がないという問題があります。インターネットによって本来の意味での仏教を実践させる方法があればよいのだがと考えているところです。

つぎに、三番目のポイントとして、寺院への参拝の問題があります。これから五十年先を考えると、寺院はそれぞれ自分のウェブサイトをつくるでしょう。そうするとバーチャル参拝も増えるし、バーチャル参拝は今でもあります。しかし実際に寺院に行って参拝する機会が減少することになると考えられます。バーチャル参拝でいいのだったら、実際に寺に行く必要がないということです。それでは寺院の未来はどうなるかですが、これまではお寺はそれを維持するメンバーの家族との世代を超えた強いつながりがありました。しかし現代では、家族の移動が増え、もといた土地から離れる人が非常に多いのです。大家族も解散するわけで、その結果として寺院とのつながりが弱まることは仕方がないですね。

でももう一つの問題は、バーチャル参拝で人が満足してしまった場合、寺院に参拝した時と同様にお寺の維持に対する責任感があるだろうかと思います。経済的な面ですね。バーチャル参拝によってお寺の維持費用にかかる経済的な基盤が崩れてくるのではないか。インターネットはタダですから。実物が目の前にあると責任感もある。この寺を維持する責任があるから維持するために何か貢献すべきだという気持ちになる。しかしインターネットの場合はどうでしょうか。クレジットカードを出しても、ややこしい。インターネットの参拝者にお寺を維持するお金をおさめてもらう方法はないのではないでしょうか。

寺院にとっては実際に赴いてその場所で参拝することでお寺が維持できるのであるとすれば、インターネットに参拝する一般の人に、お寺の維持が必要なことをどのようにすれば説得できるかという問題です。解決策としては、節談説教、福祉活動、書道、音楽のイベントなど、インターネットではできないようなことを、実際のお寺で一般の人向けにやることが有意義だと考えられます。しかしこうなると、それぞれの寺院の住職に対する負担が大変大きなものになります。今まで通りよりはるかに僧侶の仕事が増えます。それにバーチャル参拝が発達する寺院は、宗教道場としてよりも博物館と見なされるおそれがあります。

四つめのポイントは、寺院の社交的場所としての役割をインターネット上でどのように作るかということです。過去においては、寺院の社交的な役割が大きかったと思います。現在既にそうなっていますが、社会的ニーズを満たすために若い世代の人たちがインターネットに頼る。そうなった場合、集団としての「講」とか「婦人会」のような、これまで寺院が担っていた社会的役割が減少してしまうのではないかということです。バーチャルな場所には全世界の人たちの参加が可能でありますが、実際の場所として寺院に集まる人間は、集まる人の数がもともと知れている上に今後さらに減ってしまう心配があるのです。コミュニケーションがインターネットに移れば移るほど、場所的存在としての寺院に対

する認識が減少するという問題が生じるだろうということが結論として言えると思います。インターネットには「場所」という意識がありませんから。

最後に五つめのポイントは、インターネットを通して寺院と人々と間の縁が拡大するという事でしょう。今後、全世界の寺院がホームページを持つようになったら「講」とか墓参りをする人以外には、仏教に興味があるからインターネットを通して仏教を見にいこうと考え、またそのためのホームページをつくるということがますます増加することは当然ですね。お寺の存在している地域に住んでいるローカルの人たちに限らず、インターネットを通してお寺との縁作りの機会は全世界的になります。インターネットを通したコミュニケーションの言語の主流が現在のように英語であることを前提として考えている場合は言葉の問題がありますが、これからの時代においては寺院と縁が結ばれるのはお寺のある地元に住んでいる人だけではないのですね。

欧米の仏教とアジア諸国の仏教で最も異なるところは、欧米では仏教に興味がある人は自己の人生に意味的な関連性（relevance）を感じるために参加しようとする気持ちで仏教に参加している。家族の言い伝えでやっているのではなく、個人個人として有意義なものを感じるからこそ仏教に興味を持つようになるということです。たとえば仏教は有意義で勉強になる、現世の利益があり、また心を落ちつかせてくれるとか、人生の指針になるという発言をよく聞きます。そのために海外にある歴史の浅い仏教である欧米の仏教は大変いきいきとしているイメージがあります。同じようにインターネット仏教は、寺院との縁をつくりやすいことがあるから、人々と寺院との縁が結ばれる機会が増加する可能性があると思うのです。寺院のインターネットのサイトの中に面白いことがあればあるほどそこに殺到する人たちが増えるでしょう。

アジア地域におけるモダニズムの時代は国によって違いますが、帝国主義が続いていた十九世紀後半から現代に至るまで、まだモダニズムを突破していない国があります。このモダニズム、つまり近代化の中で、アジアの仏教は大変な困難に直面してきました。日本では廃仏毀釈がありました。中国でも革命が起こってから仏教に対する抑制があります。ベトナム戦争中には、南の方がカトリックになったことで、アメリカの政府はそこにキリスト教の国をつくるために仏教を弾圧してきたこともあったりします。またアジアのモダニスト達からは、仏教は古い文化の表現の代表として敵視される傾向がありました。

しかし日本でバブルがはじけてから日本のポストモダニズムの状況はより明確になってきています。今の東北の大震災で露呈したモダニズム

の限界もそうですが、韓国、台湾もポストモダニズムの時代が、すでにある程度まで始まっている気配があります。そしてモダニズムと比べるとポストモダニズムは仏教に対してやさしいのです。なぜかというとモダニズムの場合は、人々が国家のために何をするかと期待されています。しかしポストモダニズムの場合は、それは話としては残っているが心の奥には響かない。ポストモダニズムの場合は、ある意味では自己中心的なところが強いし自分のため学んでいきます。そこでは、ブッダのように悟りが開けたら世界に貢献したいという気持ちを持つことは普通なんです。そういう発想が浸透することによって、仏教が特定の国のものだけではなく、世界的なものとして繁栄するとおもいます。

ポストモダニズムの時代に入ると社会的な不安が増えていきます。しかしそれは、個人の反省や考慮をする機会もまた増えることを意味します。そうすると仏教の教義に人々がより共鳴するだろうと私は考えます。韓国、中国、ベトナムなどの国で面白いのは、五年程前からの現象ですが、これらの国で国際仏教学会の開催の機会が急速に増えていることです。仏教がその国の近代化に対して悪い影響を与えるというこれまでの政治家の価値観も、現在このようなアジアの国々では相当変化してきています。逆に、「ああ、仏教だったらいいんじゃないか、仏教だったら心配する必要ないのではないか」ということになってきていて、かなり仏教が復活しているという感じがします。国際的な面では、仏教は国家という意識をさておくことができるから仏教に対する恐怖感が減っているのでしょう。仏教によってモダニズムを突破できる、と人々が考える傾向にあると私は読んでいます。

日本社会の場合は、ポストモダニズムはインターネットの時代に移行するプロセスとしても始まっているといえるでしょう。日本仏教にとっては、そういう変化は危険な側面もありますが、チャンスが増える側面もあります。インターネット中心の文化には人々は参加しやすい。インターネットは誰でもどこへでもいける。モダニズム、ポストモダニズムよりも、さらに非個人的な感覚が減少します。ポストモダニズムの難しいところは、例えば鬱病的になっている人たちが多いことが指摘されています。ポストモダニズムの時代には、国というものがはっきり見えなくなって、自分の住んでいる国がこれからどういう方向に向いているかが見えない暗いイメージになります。人々は個人として社会のどういうところにフィットするかがわからなくなっています。でもそういった暗い気持ちを持ってインターネットに入ってしまうと、そこで急に解放される気持ちになる人たちが多いようです。好きなところにいつでも行ける、ブログで意見を載せられるところがどこにでもあるので、自分も何かに参加している気持ちになれます。そういうところでもインターネットは人気があります。

だからこそ、アジアでも欧米でも、「仏教の未来」をつくる力のある人の数そのものが、インターネットによって、これまでとは比較にならない程多くあつまります。しかし自分に縁がなさそうなサイトであれば直ちにそこには参加しなくなる。インターネットのユーザーは、あるサイトを継続的にみていたという習慣があったとしても、だからこそ、このサイトにこれから続けて行かないとだめだ、という感覚はないかもしれません。しかし、一方でフェイスブックのように、一日に何度も訪問したいと思わせるサイトもあります。つまり実際に寺へ足を運んでおとずれたという縁と、インターネットで訪問した寺院との縁は異なると考えますが、工夫をすることによって実際に足を運んで参拝するよりも、インターネット上で縁が強くなる可能性だって当然考えられるわけです。伝統的に伝わったものに対する責任感とか忠実性、自分の家族に教わった宗教、家族が所属している宗派というのはインターネットユーザーの場合には影が薄いのです。インターネット仏教の場合は、自分の好きなところに行く、またはインターネットがあるところにしか行かないということです。インターネット仏教のうまくいくところは、今現在、仏教に意義があると思っている人が多くなっているからこそうまくいっているのです。伝統があるからうまくいっているというものではありません。しかし、色々問題はありますが、今後インターネットを通して、お寺が博物館から生きている仏教を伝える場所へと変化するチャンスはあると思っています。

まだまだお話ししたい事も御座居ますが、予定の時間が参りましたので、私の話はこれで終わりにいたします。ご静聴ありがとうございました。

司会　ブラム先生、ありがとうございました。